北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第920号 平成27年4月24日

「こじき」は罪か

JR高松駅近くの路上で物乞いをし、その様子をインターネットの動画サイトに投稿した23歳の無職の男性が、香川県警察から軽犯罪法違反の容疑で書類送検されたというニュース（3月27日付朝日新聞他）に接して、最近は「こじき」というものを目にする事がなくなっていた事に改めて気付かされました。

この男性は、以前から銀行口座を公開して金を乞う行為を動画で流しており、県警から注意を受けて来たにもかかわらず従って来なかった上に、今回は物乞いを街頭で行っており、県警としては悪質と判断し摘発したようです。

軽犯罪法の1条には、「こじき、又はこじきをさせた者」は「拘留または科料」に処すると規定しています。

県警は、「働かずに哀れみを訴えての物乞いで、道徳に反する（3月27日付朝日新聞から）としています。

軽犯罪法というのは、終戦間もない昭和23年（1948年）に、社会の秩序を維持するため、公衆道徳に反する行為を取り締まる目的で制定されたものです。

軽犯罪法で禁止されている行為は、「こじき、又はこじきをさせる者」以外にも、「他人の家の内等に勝手にひそむ」「働く能力がありながら職業に就こうとせず、かつ、住居を持たずぶらぶらする」等32の行為が禁止されています。

この禁止行為の中には、「公衆の目に触れるような場所で公衆にけん悪の情を催させるような仕方でしり、ももその他身体の一部をみだりに露出」する行為というものもあります（同法第1条第20号）。公衆道徳に対する判断基準は時代と共に変化する事は理解していますが、それにしても、今の若い人達の服装を見ると、時に目のやり場に困る（不快であるか否かはともかく…）事もあり、軽犯罪法を厳密に適用したらかなり危ないものが相当あるように思います。もっとも、同法第4条においてこの法律の乱用防止を規定しているように、この法律を余りに厳密に運用すれば、社会はぎすぎすし、暗くなってしまうでしょうから、そこは大人の対応が必要だということだと思えます。

さて、「こじき」が軽犯罪法上禁止されている行為である事は先程述べたとおりですが、この言葉は仏教用語の「乞食」から転じたものといわれています。「乞食」というのは、僧侶が自分の体を維持するために食べ物等を人に乞う事をいい、行とし

て行われる托鉢にその姿を見る事が出来ますが、それが転じて、働こうともせず、他人から食物やお金を恵んでもらって生活する者をいうようになったのでしょうか。

今回の件で、托鉢や大道芸、街頭募金はどうかといった疑問を感じる人もいるかも知れませんが、募金は公的な目的が明確ですし、大道芸を見た人が帽子の中にお金を入れるのは寄付ではなく、芸に対する対価といえます。また、托鉢は宗教家の修行という事で、これも働かずにただ飯を食おうという事ではありません。

「こじきは3日やったら忘れられぬ」という言葉があります。これは、「こじき」というのは気楽な商売で、ただ飯の味を覚えたら止められないという事ですが、同時に、習慣というものは恐ろしいという事のたとえ（広辞苑から）でもあります。

何はともあれ、健康等の面で支障がない限り、大人になったのなら「怠けずに自立して働け」というのは至極当然であり、「ただ飯を食うな」なんていう事を法律で規制されている事自体を、恥じるべきでしょう。

（塾頭：吉田 洋一）